

「現代詩」と関根弘

——一九六〇—六二年の雑誌の展開と安保闘争の関わりを中心に——

加藤 邦彦

はじめに

一、全学連と関根弘——「現代詩」一九六〇年（1）

二、現代詩の会の安保デモへの参加

——「現代詩」一九六〇年（2）

三、関根弘の日本共産党除名とその余波

——「現代詩」一九六一年

四、単独編集長時代の終焉——「現代詩」一九六二年

一九六〇年は新安保条約の強行採決された年であり、それに伴う安保闘争が激化した年である。全学連に関心を持った関根弘は自身が編集長を務める「現代詩」誌上で座談会「全学連の革命意識」を企画し、みずからもデモに参加する。また、六月に樺美智子の死亡事故が起こると同誌で日本共産党を激しく糾弾。そのころの「現代詩」は好調だった。しかし、一九六一年に入ると、所得倍増計画の影響などで雑誌の勢いはトーンダウン。日本共産党を除名された関根の企画した「詩とショウの大結婚式」は大きな赤字を出し、ただでさえ厳しい「現代詩」の財政状況はさらに苦しくなった。内容に対する不満の声が大きくなっていくなか、一九六二年四月に開催された総会において「現代詩」の輪番編集制への移行が決定し、関根弘単独編集長時代が終焉する。その間の「現代詩」およびその編集母体である現代詩の会の展開を、関根を軸に検討した。

はじめに

『文藝年鑑 一九六〇年度版』所収の鮎川信夫の展望によれば、「一九五九年度の詩壇は停滞していたというのが、この一年を回顧しての大方の評者の言葉である」⁽¹⁾。停滞の理由について、鮎川は次のように推測する。

戦後も一つの曲り角にきたということが言われだして二、三年、相対安定から拡大安定へと日本の社会は大きく変ってきた。消費文化、大衆文化は、マス・コミを媒介として膨脹の一途をたどっている。戦争の記憶は日に日に薄れてゆき、人々はようやく敗戦の痛手から回復しつつあるようである。

このようなとき、詩人の意識にも変化のあらわれはないはずはない。戦後詩人の出発は、多かれ少なかれ戦争体験に根ざしたものであった。しかし、資本制社会の安定化したがい、極限状況の実感が失われるとともに、戦後詩人の世代意識を結びつけていて最も強固な靱帯の一つが切れたようである。一九五一年以来、十冊のアンソロジーを刊行してきた荒地グループの「荒地詩集」が、本年いちおう休刊となったことなど、その一つのあらわれとみられよう。古い詩的秩序に抵抗して、新しい詩的意識を確立しようと努力しつづけ

てきた思想的緊張がゆるむと同時に、個々のメンバーの関心は市民的日常性の中に解体し、グループとしての共通意識の必然性を稀薄にしていたのである⁽²⁾。

このように、一九五九年度の詩の世界では「資本制社会の安定化にしたがって」「戦後詩人の世代意識」を結びつけていた「思想的緊張」が弱まり、「グループとしての共通意識の必然性」が「稀薄」になっていた。そのような状況下で発足したのが、現代詩の会である。

現代詩の会は、月刊詩雑誌「現代詩」が新日本文学会から独立するにあたり、その編集母体として一九五八年八月に結成された。最初の運営委員長は鮎川である。ただし、一九五九年には目立った活動は行なっていない。鮎川は以下のようにいう。

戦後詩人を中心として昨年に発足した「現代詩の会」は機関誌「現代詩」を編集、刊行したが、主として本年を組織づくりの準備期間として過ごした。在来の詩人集団が陥った種々なる弊害を回避しつつ「詩の上での創造と変革をとおして、日本文学の新しい位置づけを行う」というその方針を、いかにして貫徹発展させるかという問題は一九六〇年の課題として持越された。芸術的前衛の一分派として小さく固まるか、思想的分裂から混乱して運動の方向を見失うか——さし

あたって予想されるそのような困難さえ克服すれば、詩壇の停滞を破る新しい運動のエネルギーとなるだろうと思われ³。

「主として本年を組織づくりの準備期間として過²した」現代詩の会の一九五九年におけるほぼ唯一の活動は「機関誌『現代詩』を編集、刊行」することだった。その中心人物は、現代詩の会結成以前の一九五八年四月号より「現代詩」編集長だった関根弘である。「大方の評者」が「詩壇は停滞していた」という一九五九年中も、「現代詩」では特集企画を中心に充実した誌面づくりが行なわれていた。それが「詩の枠をはなれないで、最大限の読者をもつてい⁴るにはどうしたらよいか、やはり企画である」という関根の意向の反映であることはいままでもない。

一九六〇年に入ると、現代詩の会は会員が参加する初めての総会を二月七日に開催。三月一日時点の会員数は二〇六名で、うち総会参加者は九〇名。この総会で、運営委員に鮎川信夫、長谷川龍生、関根弘、大岡信、菅原克己、岩田宏、安西均、茨木のり子、木島始、谷川俊太郎、木原孝一、飯島耕一、黒田喜夫、岡本潤、山田正弘、会計監査に壺井繁治が選出された。また、同月二二日開催の運営委員会で、鮎川が運営委員長に、関根が「現代詩」編集長にそれぞれ再任され、運営委員を辞退した谷川に代わって次点

の山本太郎が委員に、菅原が事務局長に、山田が同補佐に、飯島、石川逸子、茨木、木島、瀬木慎一、谷川、中川敏、長谷川が編集委員に就任した⁵。

以後、「現代詩」の編集は総会や運営委員会で決定した方針にしたがって行なわれたかという点、必ずしもそうではない。右の総会において、関根は「詩と詩論にかぎらない編集方針を報告、最終的には総合的な芸術運動にしてゆ⁶きたい、詩人をせまいわくから開放したい」と語っているが、「現代詩」のその後の動向は「詩と詩論にかぎらない編集方針」からまったく外れていない。また、現代詩の会にしても、一九六一年三月の第二回総会を前に関根が「現代詩の会も、正式に発足して今年でいよいよ二年目を迎えた。三月には総会を開いて、陣容一新ということになるわけだが、一年を振り返って会が会らしい仕事をまだなしていない。ほとんど雑誌の編集だけに終⁷ってしまったが、今年はそのような弱点もなんとか打開したい」と述べているように、一九六〇年中は雑誌の編集以外の目立つ活動はなかった。つまり、活動の大半を「現代詩」の編集が占めており、その方針を編集長ほぼひとりで定めていた現代詩の会は、実質的には関根弘のワンマン組織だったのである。そのことが「現代詩」の誌面や現代詩の会の動向にどう反映しているか。本稿ではこれまでの検討に引き続き⁸、

「現代詩」の動きがもつとも活発だった一九六〇年から編集体制が変わる一九六二年半ばまでの雑誌の展開を、関根を軸にみていきたい。

一、全学連と関根弘

——「現代詩」一九六〇年（一）

一九六〇年は新安保条約の強行採決された年であり、それに伴う安保闘争が激化した年である。一九五九年に共同工業新聞を退社した関根弘は、前年からしばしば行なっていたラジオ番組の録音構成の仕事で全学連と初めて接触を持った⁹。全学連に関心を持った関根は、「現代詩」一九六〇年二月号から連載が始まる「こんにちは」というインタビュー欄の第一回ゲストに、当時日本共産党東京都委員だった安東仁兵衛を指名。日本共産党員でもあった関根は、同党がトロツキストとして批判する全学連に対する党の考え方を聞きたかったのだ。その際、関根は革共同（革命的共産主義者同盟）、共同（共産主義者同盟）の違いやトロツキズムについての「初歩的な知識¹⁰」を教わった。

新安保条約調印のために訪米する岸信介首相を阻止する目的で行なわれた一月一六日の羽田闘争を知り、「胸のすつきりするおもいをした」関根は、共産党の機関紙「アカハタ」が相変わらず全学連をトロツキストと批判するの

をみて「右からも左からも叩かれ放しでなお屈しない否定の渦の中心に、先進的などはいえないにしても、現代的課題がひそんでいるような気がしてならなく¹¹」る。そんななか、関根は「現代詩」一九六〇年四月号で三名の大学生を招いて座談会「全学連の革命意識」を組む。少々長いが、そのリード文を全文引用する。

全学連の一・一六羽田斗争は六〇年代の開始にあたり、いろいろな意味で注目される事件であった。ごく大雑把に言つて、世代論とインテリゲンチヤ論が集中的に表現されたものではあるまいか。政治的評価をせつかちにくだすまえに、わたしたちはもんだいの本資を深く掘り下げてみたい。

全学連の中央指導部は、げんざい、主流派（共産主義者同盟）によつて占められているが、政治的傾向としては、このほかに革命的共産主義者同盟、トロツキスト同志会（社会党左派）、日本共産党などがある。

共産主義者同盟の下部組織には、社会主義学生統一戦線がある。これが二大勢力である。共産党は、自派以外の政治的傾向をすべてトロツキストと規定しているが、トロツキズムの内容はいちようではない。まさに七花八裂の様相を示しているわけである。

この座談会には、なるべく各派の意見を反映したいと計画したのだが、一橋大（革共同系）、女子美（共同系）の二氏が欠席して、いくぶんかたよつたものになつた。しかし、いろいろ批判はあるにせよ、この座談討論を読むならば、現代の学生がいかに真剣に、安保反対斗争にとりくんでいるかがわかるであろう。さきに現代詩新人賞の藤森安和を送つた本誌としては、世代のもんだいをアイマイに放置しておきたくない。ここに結論は示されていないにしても、わたしたちはここから奮起せざるをえないにもかを受けとるであろう。

いま、国会では安保条約批准に向つて討議が進行中である。わたくしたちの反対の意志に代えて、この座談会を送る。

ここからうかがわれるのは、安保闘争に真剣に取り組む学生たちの態度に関根は心を打たれたこと、その関根が学生たちの動きを「世代のもんだい」として捉えようとしていることである。右のなかに藤森安和の名前がみえるが、関根はその詩を評価する際にも世代差の観点から考えようとした。¹³後続する世代の理解者あるいは庇護者としての自覚。この座談会が掲載された「現代詩」は「もんだい」がもんだいで、きわめて生硬なものになり、詩に直接かんけい

はなかつたが、非常な人気を呼び、各書店で売切続出し¹⁴た」というから、編集者としての関根の感覚は悪くない。ところが、関根はその感覚を自身の政治感覚と結びつけてしまった。それが、「自派以外の政治的傾向をすべてトロツキストと規定」する日本共産党への違和感を関根にもたらしめている。ただし、この時点の関根はまだ「党は絶対だと思つて」おり、「一・一六の羽田事件の犠牲者救援カンパが行われたとき、はじめ発起人になつていながら、党中央から呼出しを受けたため、発起人を途中から取消¹⁵」すという出来事もあつた。

やがて関根はみずからも安保デモに参加するようになった。「現代詩」一九六〇年五月号には、関根の制作した「安保条約反対闘争歌」が掲載されている。

起ちあがるときだ／今だ！たいせつなときは／こどもたちの未来のために／憎しみの火／燃えあがらないうちに／ひと足早く／冷やしてしまうのだ／起て起て起ちあがれ！／道をえらぶときだ／今だ！たいせつなときは／民族のしあわせのために／かなしみの涙／溢れないうちに／ひと足早く／堰止めてしまうのだ／道 道をえらべ！／歌をうたうときだ／今だ！たいせつなときは／世界が殺しあわないために／死の灰が空／おおわないうちに／ひと足早く／や

めさせてしまうのだ／歌 歌をうたえ！／前進
するときだ／今だ！ たいせつなときは／貧しさから
の解放のために／戦線が光／うしなわないうちに／ひ
と足早く／勝利してしまうのだ／進め 進め 前へ進
め！¹⁷

言葉の意味が直接的すぎて、作品としての出来映えは今
ひとつだ。しかし、関根からの依頼で林光が曲を付けると、
「安保条約反対闘争歌」は広く歌われるようになった。ま
た、デモでは「たちあがれ」というタイトルで一番が繰り返
返し歌われた。「わたしはともに歌いながら、ひどく幸福
な気分であった。そしてこんな重大なときに、自分が幸福
だなんて思っているのだろうか、と反省もしていた」¹⁸とは
関根の回想だが、大衆に詩がもつと読まれることを願って
いた関根らしいナルシステイックな感慨である。そのこと
を踏まえると、関根の全学連に対する共感とは自分が下の
世代、右の歌詞でいえば「こどもたち」の理解者であるこ
とに由来するものであり、結局は自己陶醉でしかなく、政
治思想など関係なかったのかもしれない。

二、現代詩の会の安保デモへの参加

——「現代詩」一九六〇年（二）

「現代詩」一九六〇年八月号では安保特集「火花より焰は

燃え上がる」が組まれた。そのうちのひとつとして掲載さ
れた茨木のり子「怖るべき六月」によれば、現代詩の会の
「安保批判の会」への集団加入が運営委員会で決まったの
は六月一日。「遅きに失したが、開かれぬよりはまし
だった」、「現代詩の会が、今頃入ることはまことに間が抜
けているようだ」¹⁹と茨木はいう。また、「今年の総会の時
に、安保問題にどう対処するか？ という質問が出れば運
営委員会には、それを討議する用意があつたということだ
が、誰からもその質問が出なかつた」²⁰つまり、それまで
「現代詩」誌上に表示されていた全学連や安保闘争への関心
は関根個人によるもので、編集母体である現代詩の会は関
与していなかつたわけである。現代詩の会および「現代
詩」における関根の独裁ぶりがうかがわれる。

そもそも、現代詩の会に属する詩人たちは新安保条約や
安保闘争を果たしてどれほどみずからの問題として考えて
いたのだろうか。茨木は現代詩の会有志として六月一八、
二二日の統一行動に参加したときの感想のなかに「デモも
何度も繰返していると、これが行動と呼ぶものか、ど
うか疑問が頭をもたげて」²¹きたと記している。そのことを
考慮すると、茨木に限らずデモに参加した詩人の大半は社
会情勢や関根にリードされた「現代詩」の動向に従つただ
けだったのかもしれない。「私は、安保反対運動には参加

しなかった。その理由を言わせてもらえば、反対運動に反対だったからにすぎない。安保反対運動を支える理論的根拠も現実的根拠も、すこぶる薄弱なものにみえた。「なんにしても、ジャーナリズムの論調にしたがって、自分の政治的意見を立てているような人が多すぎる」、「しかし、私は、他人がどのような政治運動をやるかと、それを阻止しようとするほどの熱意は持っていない。また、説得したいとも思っていないし、説得できるとも思っていない。小さな政治でも、大きな政治でも、理性で動いている部分はわずかだから、あきらめるほかはない」と述べたのは現代詩の会運営委員長の鮎川信夫であるが、この発言は思想も熱意も持たず、流されるままにデモに参加した現代詩の会有志たちへの皮肉にもみえる。

ところで、現代詩の会の集団加入が決まった一九六〇年六月一五日は、樺美智子が全学連の国会議事堂突入の際に死亡した日でもある。現代詩の会運営委員会は「それらのことを知らずに」「夜おそくまで話していた」。関根弘は八月号の特集のなかで、樺をトロツキストと批判する日本共産党を激しく糾弾する。

カラスの鳴かない日はあつても、「アカハタ」にトロツキスト攻撃ののらない日はない。トロツキストと、
いうコトバで具体的には誰をさしているかというのと、

全学連指導部の共産主義者同盟員をさしている。共産主義者同盟の綱領にはソヴェト帝国主義ともたたかわなければならぬと書いてあるから反ソ反共であり、かれらは革命の裏切分子であるという筆法である。書記長の宮本顕治までが、そういう三段論法で割切つて、全学連の革命的エネルギーの根源を探つてみようとならないのだから怠慢である。死んだ樺美智子は日本には前衛政党が存在しないのだから新しく作るほかないのだとお母さんについてたそうだが、樺美智子の英雄的な死を評価できなかった日本共産党は、そのことによつて、前衛党としての資格喪失をわたしの目にも明らかにしたのである。

共産主義者同盟およびその影響下にある全学連主流派が、六・一五の時点ではもつとも勇敢にたたかいた。安保斗争の局面を開いたことは客観的な真実である。樺美智子の死によつて共産主義者同盟や全学連主流派の行動を正当化してはならないと主張する日本共産党は、裏を返せば自らの無指導、無能力を正当化しているのである。

この批判はやがて関根個人だけでなく、「現代詩」の動向にも影を落とすことになるが、そのことについては後述する。

七月三十一日、現代詩の会拡大運営委員会が開催。出席者は、鮎川信夫、茨木のり子、大岡信、岡本潤、菅原克己、関根弘、山田正弘。編集委員会から石川逸子、中川敏、オプザバーとして青木実、秋村宏、城脩、三木卓も参加した。⁽²⁵⁾「安保条約は今後の十年間、わたしたちを縛ることになつた」ため、「わたしたちは長期の困難を予想しなければならぬ」。それに伴い、「場当りにやつてきた雑誌の編集についても、息の長い、落着いたものにする必要を感じた。現象の表面だけ追いかけても仕方があるまいとかんがえた⁽²⁶⁾」というのが、このたびの拡大委員会開催の趣旨である。委員会では、今後の雑誌の方針として以下のことが確認された。

この会の性格として簡単に結論はでなかつたが、それでもいろいろ示唆に富んだ発言があつた。そのうちのおもなもの拾うと、現代詩の会は、ひとつの運動体であることをあらためて確認した。したがつて雑誌は、会の機関誌としての性格を損なうものであつてはならないこと、啓蒙雑誌のようなものにはしないこと、会員外の創造的エネルギーを触発するためには、作品批評の毎月公募と、新人賞（作品）の年二回発表という形をとつてゆくという基本方針を決めた。

それからの組織方針としては、安保斗争の経験か

らんかんがえても、左翼イデオロギーの狭い溜り場にしないうことをあらためて確認した。異なる立場を認め合うという原則を、単に政治的立場からだけでなく、文学的立場からつらぬくことにした。白でなければ黒、黒でなければ白という割り切り方がアトを絶たないが、白でもあれば黒でもあるという存在を認めてゆくことが、げんざいはもつとも重要だと思つからである。⁽²⁷⁾

編集長である関根の意向が色濃くあらわれている「現代詩」は、ともすると「啓蒙」的で、「左翼イデオロギーの狭い溜り場」のようにみえる。ただし、関根が肩入れした全学連主流派は「右からも左からも、左のもつとも近いと思われるところからも攻撃の矢玉を浴びていた⁽²⁸⁾」。「異なる立場を認め合うという原則」は、委員会でも確認された方針とはいえ、日本共産党員でありながら全学連の行動も支持する関根の考えをやはり反映したものである。

また、「会員外の創造的エネルギーを触発する」ために「作品批評の毎月公募と、新人賞（作品）の年二回発表という形をとつてゆくという基本方針」がこのとき決定した。さつそく実現したのが「作品批評の毎月公募」で、「わたしは批評する」という「現代詩」掲載作品の読者による投稿批評コーナーが右の委員会報告が掲載された翌一〇月号から一九六一年九月号まで続いた。また、それを継ぐもの

として一九六一年一〇月号より「テーマ評論応募エッセイ」のコーナーが設けられた。ちなみに、後者の第一回掲載作品は長田弘「変貌する風——イメージ試論」。長田は一九六一年六月号の「わたしは批評する」欄に掲載された木原啓允「離婚のチャンス」評が「現代詩」初登場で、以後めきめきと同誌における存在感を増していく。

一方、「新人賞（作品）の年二回発表」は実現せず、それまでと同じく入選作が年一回発表された。年二回にする案は、一九五九年一二月号発表の第三回新人賞に入選した藤森安和が総合週刊誌や一般紙などで話題となったことから出たのだろう。つまり、発表回数を多くすることで二匹目のどじょうを狙ったわけである。しかし、第三回までそれなりに多かった応募数は一九六〇年一二月号で入選発表が行なわれた第四回以後激減⁽²⁹⁾、一九六三年と翌年発表の第六回、第七回は新人賞受賞作品なしであった。応募数激減の理由は不明だが、雑誌内容と読者の関心の乖離に因があったと思われる。

それでも、ほとんどすべての記事を女性が執筆した七月号の特集「婦人現代詩」の売れ行きもよく、一九六〇年中の「現代詩」は好調であったといえよう。

三、関根弘の日本共産党除名とその余波 ——「現代詩」一九六一年

一九六一年になると「現代詩」はトーンダウンし、いわば安保闘争という祭りのあとの停滞感がある。なぜトーンダウンしたのか。その理由のひとつとして、池田勇人内閣による所得倍増計画の策定が挙げられる。一九六一年一月号の「編集ノート」に「今年の課題であるが、日本経済の構造把握をじっくりやってみる必要があるだろう。所得倍増計画で、いろいろな面白い動きが全国にみられるから、ルポ面を強化して、詩のイメージを現実から浮き上らないようにしてゆきたい。その点については、これまでも実績のあることで、とりたてて新しいことはないが、執筆者に新人を起用していきたい⁽³¹⁾」と記されているように、関根は当初この計画を前向きに捉えていたが、三月号から「池田内閣の所得倍増というインフレ計画の煽りで、物価が昂騰、印刷代、製本代の値上りで、本誌も、原価計算を再検討しなければならなくなつた⁽³²⁾」ため、それまでの総一〇八ページを総一〇二ページに変更、カラーページも廃止。一〇月号からは定価を一〇〇円から一二〇円に上げざるをえなくなつた。ちなみに、一九六一年九月号で永六輔が「現代詩」から原稿依頼があるのも、原稿料が貰えないのも

シヨック³³」と述べているように、執筆者への原稿料は当時
はもちろん、創刊以来ずっと支払われていなかった。

こうしたなか、「現代詩」一九六一年三月号の「こんに
ちは」欄に「さしあたってこれだけは」という吉本隆明、
谷川雁、関根の対談が掲載された。「こんにちは」は、さ
きにも触れたように関根を司会とするゲストへのインタ
ビュー欄だが、このときは谷川が司会を担当し、吉本と関
根の対談となった。

「さしあたってこれだけは」というタイトルは、前年に発
布された同名の共同声明に由来すると考えられる。『谷川
雁セレクトションI——工作者の論理と背理』所収の共同声
明のまえがきによると、「この声明は、わが国の運動の中
に慢性的に生きている、組織内の単独採決の要素、意見の
ちがう者に対する組織的処分の仕方、集団間の相互批判に
おける留保なしの絶対的排除の傾向、といったごく一般的
なことがらを批判したもので、「たとえば民社党や全労
の人々の共産党への対し方に対する批判」を前提とし、
「全学連非難の仕方、共産党非難の仕方などに対する意見
としてだされたもの」である。関根によれば、谷川が草案
を作成し、数名で本文を確定したこの声明を「武井昭夫、
藤田省三、谷川雁、吉本隆明、鶴見俊輔、それにわたしを
くわえた六人の共同署名文書として、三百名の文化人、知

識人に發送して、賛成署名を募」り、「賛成回答百二十八
名の署名簿とまえがきをつけて」「労働組合その他各方面
に發送した」。

さきに言及した樺美智子死去の際の批判とこの共同声明
を理由に関根が日本共産党を除名されたのは、一九六一年
四月七日のことである。

関根弘は、雑誌「現代詩」八月号に『樺美智子の死に
思う』を発表して、党を中傷ひぼうし、悪ばをもって
攻撃し、また声明文「さしあたってこれだけは」の発
起人の一人として、党への攻撃を意味する共同声明を
組織し、一貫してトロツキストと同調して、反党的挑
発の言動を行ない、党と人民の利益をいちじるしく傷
つけた。これは党規約第二条の第一、二、八、九項の
義務にいちじるしく反する反党行為である。よって中
央委員会は、第六十二条一項にしめされた権限にもと
づき第五十九条、第六十条により関根弘を除名処分に
付する。

一九六一年四月七日

日本共産党中央委員会³⁶

このとき、「共産党を批判したり、悪口を書いたりする
かわり」に関根が書いたのが「この部屋を出てゆく」（新
日本文学）一九六一年六月」という詩だ。

この部屋を出てゆく／ぼくの時間の物指しのある部屋
を／書物を運びだした／机を運びだした／衣物を運
びだした／その他ガラクタもろもろを運びだした／つ
いでに恋も運びだした／時代おくれになった／炬燵
や／瀬戸火鉢／を残してゆく／だがぼくがかなしいの
はむろん／そのためじゃない／大型トラックを頼んで
も／運べない思い出を／いっぱい残してゆくからだ／
／がらん洞になった部屋に／思い出をぜんぶ置いてゆ
く／けれどもぼくはそれをまた／かならず／とりにく
るよ／大家さん！⁽³⁸⁾

この詩を制作したとき、関根はおそらく中野重治「夜明
け前のさよなら」(『中野重治詩集』ナツブ出版部、一九三
一年一〇月)を意識していたであろう。

僕らは仕事をせねばならぬ／そのために相談をせねば
ならぬ／然るに僕らが相談をすると／おまわりが来て
眼や鼻をた、く／そこで僕らは二階をかへた／露地や
抜け裏を考慮して／こゝに六人の青年が眠つてる／
下には一組の夫婦と二人の赤ん坊とが眠つてる／僕は
六人の青年の経歴を知らぬ／彼等が僕と仲間であるこ
とだけを知つて居る／僕は下の夫婦の名前を知らぬ／
たゞ彼らが二階を喜んで貸して呉れたことだけを知つ
て居る／夜明けは間もない／僕らはまた引越すだら

う／靴をか、へて／僕らは綿密な打合せをするだらう
／着々と仕事を運ぶだらう／明日の夜僕らは別の貸布
団に眠るだらう／夜明けは間もない／この四畳半よ
／コードに吊るされたおしめよ／煤けた裸の電球よ／
セルロイドのおもちやよ／貸布団よ／蚤よ／僕は君達
にさよならを言ふ／その花を咲かせるために／僕らの
花／下の夫婦の花／下の赤ん坊の花／それらの花を一
時にはげしく咲かせるために⁽³⁹⁾

中野の詩では、「仕事」を成し遂げ、革命という「花を
咲かせるため」に、「仲間であることだけを知つて居」て
「経歴を知らぬ」い「六人の青年」と「僕」が過ごした
「四畳半」や、「二階を喜んで貸して呉れた」「名前を知ら
ぬ」い「夫婦と一人の赤ん坊」のものと思われる「コード
に吊るされたおしめ」「セルロイドのおもちや」などの日
常生活に「さよなら」が告げられており、そこに抒情性が
ある。

一方、「夜明け前のさよなら」の「僕」とは違って、「こ
の部屋を出てゆく」の「ぼく」は何のために「この部屋を
出てゆく」かなければならないのか判然としない。そのため
、「ぼく」は「部屋代をためすぎて(大家さん)(資本家)
から追い出される労働者⁽⁴⁰⁾」と解釈する評者もいるが、伝記
的に考えると「大家さん」は日本共産党を指し、「ぼく」

は党を除名された関根自身である。追い出される「ぼく」は物は運び出すことはできても、「思い出」すなわち党への思いや自分の政治理念は置いていかざるをえない。「それをまた／かならず／とりにくる」という願望は、「さよなら」をいつてみずから「二階」を去っていく中野の詩とは正反対のベクトルで、抒情性どころか党に対する未練しか感じられない。

関根の日本共産党除名は、「現代詩」にも影響を及ぼした。「現代詩」は発行を飯塚書店が担当していた。関根によると、「飯塚書店は木曜会（共産党系出版社の集まり）の会員である関係上、被除名者が中心にいる現代詩の会の機関誌を出していることは都合のいいことではなくなつた」。それでも刊行中止に至らなかつたのは、「現代詩」が現代詩の会の機関誌だつたためである。そうである以上、休刊は関根の一存では決められない。ただし、すでに示したように「現代詩」の台所事情は苦しかった。

現代詩の会は一九六一年三月一九日に第二回総会を開催。出席者は四九名で、前回から大幅に減っている。運営委員選挙では、安西均、茨木のり子が辞退するが、鮎川信夫、飯島耕一、岩田宏、大岡信、岡本潤、木島始、木原孝一、菅原克己、関根弘、壺井繁治、中川敏、長谷川龍生、堀川正美、山田正弘が選ばれ、会計監査は新川和江、渋谷定輔

に決定した。また、後日行なわれた運営委員会で委員長に大岡信が選出され、編集委員には瀬木慎一が抜ける代わりに岩田弘と堀川正美が新たに加わつた。⁽⁴²⁾ 高良留美子は、現代詩の会では「鮎川運営委員長と関根編集長は一貫して変わら」なかつたと述べているが、勘違いである。

この総会の大きな議題は、「これまでの活動の検討と今後の運動について（安保闘争と現代詩の問題）」だつた。総会では、一九六〇年八月号に掲載された関根の樺美智子擁護と日本共産党批判について「編集長が特定の集団を誹謗するようなニュアンスのある巻頭論文を書いたことは、会あるいは現代詩の性格を誤解される恐れがある。今後、特定の政治的主張を述べる場合には注意して欲しい」という抗議があり、「公には編集長でも、個人として意見を述べるのは一向にさしつかえないではないか。反対意見があれば誌上にそれを反映していくことだ」という鮎川信夫や「あれはあくまで詩人として感じたことをかいたものだ」という関根本人の反論などがあつた。また、財政的な問題について「催し物からの利潤を運動の費用にあてる腹案もある⁽⁴³⁾」という発言が関根によってなされた。

この関根の案は、実行に移される。七月一三、一四日にイイノホールで開催されたイベント「詩とシヨウの大結婚式」がそれである。このイベントでは、寺山修司の講演、

土方巽とヨネヤマママコの舞踏、童謡の歌唱、谷川俊太郎作の詩劇、藤森安和を被告人とする模範裁判などが行なわれ、会場は「ほぼ満員の盛況」だったが、にもかかわらず「一万円近い赤字」⁽⁴⁷⁾となった。企画者である関根は「七月におこなった「詩とシヨーの大結婚式」は、儲らなかつたので、大成功とはいいがたいが、はじめての試みとしては評判がよかつた。毎度、いうとおり雑誌の上だけでなんかやつているのでは物足りないわけで、涼しくなつたらまたぞろになにかやりたいと思つている」とイベント直後は前向きに捉えていたが、後述するようにまもなく多くの非難を浴びることとなる。

もうひとつの催しとして、当時活躍していた詩人たちを講師とする「詩の教室」が九月一日から一二月一日まで開校された。こちらについては「予定の応募者数をはるかにこえた七十名からの聴講者」⁽⁴⁸⁾があり、参加者も「平均三十五名から四十名」⁽⁴⁹⁾と好評で、「千円余りの赤字」となった。

四、単独編集長時代の終焉

——「現代詩」一九六二年

一九六一年においても「現代詩」は六月号の「安保2年」などさまざまな特集企画を組んでおり、なかでも「現

代の孤独」と「革命史私観」をそれぞれ特集した二月号、二月号は売れ行きがよかつたという。⁽⁵³⁾しかし、一九六二年に入ったあたりから雑誌内容への不満の声が大きくなつていく。

「現代詩」では各地に研究会が組織されていたが、東京研究会では「十年先はこうなる」という特集を組んだ一九六一年一月号について「特集おもしろくねえな!」⁽⁵⁴⁾という声が挙がつた。また、一九六二年一月の東京研究会では前年の誌面を振り返って「昨年の機関誌活動では、特集「安保二年」に比較力が注がれていた、と言えるが、それ以降、従来続けて来た軽特集の企画ギレの感もあり、思いつきの感じが強く、会の姿勢がボケて来ているのではないか、原則が見失われて来ているのではないか、という意見が出た」⁽⁵⁵⁾。ほかに、新潟研究会では一九六二年二月号の合評会で「特集のマンネリ化」の指摘があり、「二月号は本当に面白くなかつた、これでは、現代詩から大衆が離れてゆくのも無理はない」と「集つたメンバーが口をそろへ」⁽⁵⁶⁾えたという。

こうしたなか、一九六二年四月八日に出席者四五名で開催されたのが第三回総会である。飯塚書店の報告によれば、このころの「現代詩」は「平均二千部の売れ行きで約四十%が返本、毎月一万五千円ほどの赤字」⁽⁵⁷⁾で、ますます厳

しい状況となっていた。いくら飯塚書店が「発行の面は引き受ける」、「現代詩」を飯塚書店自身PRの場として考えている」と擁護しても、この赤字額を聞いて総会に参加した会員たちが不安を持たないわけがない。

雑誌に関する報告に続き、前年開催の「詩とシヨウの大結婚式」について「大へんもうかるという予測のもとにやつたが、舞台裏の費用や作曲料など予期しなかつた出費がかさみ、三万余円が未払の状態になつてい」たこと、「交渉の結果、イイノホールが会に対してお祝いとして二万余円を負担してくれることになつたが、差引九千五百三十円が赤字になつている」ことを関根が説明し、赤字分は「一般会計に繰り入れて捻出すること」が決定すると、参加者から「批判、質問が続出」、「会員の中にはかなりの不満をぶちまける者もあつた」。

内容の面白くなさ、雑誌の赤字発行、「詩とシヨウの大結婚式」の財政的な失敗。これらのうち、内容の面白くなさについては関根編集長時代が長く続いたことによるマンネリ化や、日本共産党除名による関根自身の意気消沈も関係しているだろう。

おそらくそれらを受けて、総会では次のことが採決された。ひとつは機関誌編集強化について。「十一名から構成される今の編集委員会の組織では、各委員の案を同時に反

映させにくい。そのため、編集長が独裁しているような印象をあたえがちだ。そこで編集長を廃止し、運営委員の互選によつて数名の編集委員を選び、編集に対して集団責任をもつような体制（集団責任編集制）を整える」というのがその目的だが、事実上の編集長更迭である。編集体制の変更について、のちに関根は「みんな自分でやりたくなつたようなので、それならどうぞと交代制にした」と小田久郎に語つたというが、関根には問題の本質がみえていなかった可能性がある。

もうひとつの採決事項は、事務局強化について。その趣旨は「会の運動をより活潑に円滑にすすめていくために、事務局の仕事を分化させ、事務その他の連絡にあたる部門運動や催しの企画にあたる部門などの専門部を設立する。さらに飯塚書店との関係を明確にしながら、会員の詩集その他の出版も会でやつていけるようにしたい」というものだ。一九六三年になると、現代詩の会は自費出版の詩集の委託編集を行なうようになるが、それはこのときの決定に基づいている。

運営委員には大岡信、関根弘、岩田宏、長谷川龍生、山田正弘、鮎川信夫、堀川正美、菅原克己、中川敏、飯島耕一、三木卓、岡本潤、木原孝一、吉野弘、安西均が選ばれたが中川が辞退し、次点の高良留美子が委員に加わつた。

また、会計監査は渋谷定輔、新川和江が再任となった。⁽⁶³⁾このなかから編集委員になったのは、飯島耕一、岩田宏、大岡信、関根弘、長谷川龍生、堀川正美、三木卓の七名である。

こうして、一九五八年四月号から続いた関根弘の単独編集長時代は一九六二年六月号で終焉し、翌七月号から輪番編集の新体制がスタートする。新体制となった「現代詩」について、小田久郎は「編集上の軋みが目立つようになり、誌面も特集が消えて緊張感が失われていく」と述べている。「特集が消え」たというのは小田の誤解であり、新体制になつてからも毎号のように特集は組まれているが、「緊張感が失われていく」点については同感だ。一方、「六〇年代の二つの頂点を、ぼくのプライベートな視点でいっておくと、ひとつは「現代詩」という雑誌で、大岡さんや堀川さんたちが編集委員になった時代。編集委員たちが、巻頭に三十枚の現代詩時評を毎号書く。アクチュアルであると同時に、非常に根源的な感じのする現代詩時評が次々と出た時代ですね⁽⁶⁴⁾」という天沢退二郎の回想もある。ただし、いまは評価を急ぐべきではないだろう。

一九六四年一〇月号の廃刊まで、あと二年四ヶ月。その間の「現代詩」の動向については、稿を改めて検討したい。

注

- (1) 鮎川信夫「詩壇展望・一九五九年」、『文藝年鑑 一九六〇年度版』新潮社、一九六〇年六月、五四頁。
- (2) 同右、同頁。
- (3) 同右、同頁。
- (4) 関根弘「企画病」、「現代詩」第八卷第九号、飯塚書店、一九六一年九月、四四頁。
- (5) 事務局「現代詩の会」第一回総会メモ、「現代詩」第七卷第四号、飯塚書店、一九六〇年四月、九二―九六頁参照。なお、一九五八年八月に現代詩の会準備会として行なわれた結成懇談会がそのまま第一回総会となったが、このときの参加者は限られており、会員参加で行なわれた総会は一九六〇年が初めてだった。後者も第一回総会とされていて、ややこしい。
- (6) 同右、九二頁。
- (7) 「編集ノート」、「現代詩」第八卷第二号、飯塚書店、一九六一年二月、一〇八頁。
- (8) これまでの検討については以下の拙稿を参照されたい。「新日本文学会と「現代詩」(「現代詩」復刻版 別冊) 三人社、二〇二〇年四月)、「新日本文学会から現代詩の会へ——「現代詩」・一九五八年——」(『京都語文』第二九号、佛敎大学国語国文学会、二〇二二年一月)、「1960年前後の詩壇ジャーナリズムの展開と藤森安和——詩誌『現代詩』を中心に」(『Intelligence』第二二号、20世紀メディア研究所、二〇二二年三月)。
- (9) 関根弘「針の穴とラクダの夢」草思社、一九七八年一〇月、二六〇―二六四頁参照。

- (10) 同右、二六八頁。
 (11) 同右、二七〇頁。
 (12) 大瀬振・金山千恵子・黒羽純久・(司会) 関根弘「座談会 全学連の革命意識」、前掲書(5)、六二頁。
 (13) 拙稿「1960年前後の詩壇ジャーナリズムの展開と藤森安和——詩誌『現代詩』を中心に」、前掲文(8) 参照。
 (14) 「編集ノート」、「現代詩」第七卷第五号、飯塚書店、一九六〇年五月、一〇八頁。
 (15) 関根弘、前掲書(9)、二七三頁。
 (16) 関根弘「樺美智子の死に思う」、「現代詩」第七卷第八号、飯塚書店、一九六〇年八月、二五頁。
 (17) 関根弘「安保条約反対闘争歌」、前掲書(14)、一〇七頁。
 (18) 関根弘、前掲書(9)、二七四頁。
 (19) 茨木のり子「恐るべき六月」、前掲書(16)、三七頁。
 (20) 同右、同頁。
 (21) 同右、三九頁。
 (22) 鮎川信夫「政治嫌いの政治的感想」、「政治公論」第四一号、政治公論社、一九六一年二月、四一、四八―四九頁。
 (23) 茨木のり子、前掲文(19)、三八頁。
 (24) 関根弘、前掲文(16)、二七頁。
 (25) 「現代詩短信」、「現代詩」第七卷第九号、飯塚書店、一九六〇年九月、二〇頁参照。
 (26) 「編集ノート」、前掲書(25)、一〇八頁。
 (27) 同右、同頁。
 (28) 関根弘、前掲書(9)、二七二頁。
 (29) 新人賞応募者数の推移は以下の通り。第一回(一九五八年) 一二七三篇、第二回(一九五九年) 九一三篇、第三回

- (一九五九年) 八五六篇、第四回(一九六〇年) 三三三篇、第五回(一九六一年) 三九七篇、第六回(一九六二年) 三六六篇、第七回(一九六三年) 二五三篇。
 (30) しま・ようこ「現代詩の会第二回総会ノート」、「現代詩」第八卷第五号、飯塚書店、一九六一年五月、七六頁参照。
 (31) 「編集ノート」、「現代詩」第八卷第一号、飯塚書店、一九六一年一月、一〇八頁。
 (32) 「編集ノート」、「現代詩」第八卷第三号、飯塚書店、一九六一年三月、一〇二頁。
 (33) 永六輔「シヨック・ファン」、前掲書(4)、二三頁。
 (34) 谷川雁・関根弘・武井昭夫・鶴見俊輔・藤田省三・吉本隆明「さしあたってこれだけは『共同声明』」、「谷川雁セレクシヨンI——工作者の論理と背理」 日本経済評論社、二〇〇九年五月、一九五頁。
 (35) 関根弘、前掲書(9)、二九六頁。
 (36) 日本共産党中央委員会書記局「関根弘ならびに武井昭夫の規律違反にかんする決定の発表にあたって」、「アカハタ」一九六一年四月一二日、二面。
 (37) 関根弘、前掲書(9)、二九八頁。
 (38) 関根弘「この部屋を出てゆく」、「新日本文学」第二六卷第六号、新日本文学会、一九六一年六月、一三六一―一三七頁。
 (39) 中野重治「夜明け前のさよなら」、「中野重治詩集」ナツ出版部、一九三一年一〇月、九七―一〇〇頁。
 (40) 嶋岡晨「この部屋を出てゆく」、「日本名詩集成」學燈社、一九九六年一月、三九八頁。
 (41) 関根弘、前掲書(9)、二八九頁。
 (42) しま・ようこ、前掲文(30)、七六一―七七頁参照。

- (43) 高良留美子「現代詩の会」解散への道——関根弘・花田清輝・堀川正美・黒田喜夫・吉本隆明・長田弘』『女性・戦争・アジア——詩と会い、世界と出会う』土曜美術社出版販売、二〇一七年二月、三一―一頁。
- (44) しま・ようこ、前掲文(30)、七六―七七頁。
- (45) 「詩とシヨウの大結婚式」広告、「現代詩」第八卷第八号、飯塚書店、一九六一年八月、一九頁参照。
- (46) しま・ようこ「詩とシヨウの大結婚式」、前掲書(4)、八一頁。
- (47) 松本俊夫・関根弘「芸術運動とはなにか——「現代詩の会」解散をめぐる」、『新日本文学』第二〇卷第二号、新日本文学会、一九六五年二月、一三〇頁。
- (48) 「編集ノート」、「現代詩」第八卷第一〇号、飯塚書店、一九六一年一〇月、一〇二頁。
- (49) 「詩の教室時間割」、「現代詩」第八卷第一号、飯塚書店、一九六一年十一月、二二頁参照。
- (50) 「現代詩短信」、前掲書(49)、一〇一頁。
- (51) 名取栄子「詩の教室」開校から今日まで、「現代詩」第八卷第一二号、飯塚書店、一九六一年一二月、七七頁。
- (52) しま・ようこ「現代詩の会第三回ノート」、「現代詩」第九卷第六号、飯塚書店、一九六二年六月、七三頁。
- (53) 同右、七二頁参照。
- (54) しま・ようこ「現代詩短信」、「現代詩」第九卷第一号、飯塚書店、一九六二年一月、五一頁。
- (55) 三木卓「現代詩短信」、「現代詩」第九卷第三号、飯塚書店、一九六二年三月、四三頁。
- (56) 野火明文「現代詩短信」、「現代詩」第九卷第五号、飯塚書店

店、一九六二年五月、一五頁。

(57) しま・ようこ、前掲文(52)、七二頁。

(58) 同右、同頁。

(59) 同右、七三頁。

(60) 同右、七五頁。

(61) 小田久郎『戦後詩壇私史』新潮社、一九九五年二月、二九四頁。

(62) しま・ようこ、前掲文(52)、七五頁。

(63) 同右、同頁参照。

(64) 小田久郎、前掲書(61)、二九三頁。

(65) 天沢退二郎・吉増剛造・長田弘・清水昶「共同討議 現代詩の主題を追う」、「ユリイカ」第三卷第一四号、青土社、一九七一年一二月、一四三頁。

※本稿は、JSPS科研費「J19K00357」J22K003130助成を受けたものである。

